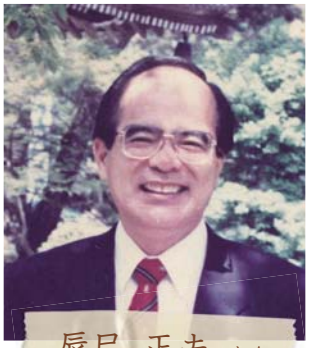
シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

Vol.20



辰巳 正夫 さん

長らく西淀川で市会議員を務めた辰巳正夫さんから、昔の西淀川の様子についてお話を伺いました。

2017年5月15日
聞き取り

◆健康を守る会とまちづくり

辰巳さんは、大阪市北区都島の生まれで、高槻市育ちです。25歳の時に早稲田大学の大学院を卒業して、西淀川にやってきます。1961年のことです。当辰巳さんは「柏花健康を守る会」に就職します。健康を守る会は、戦後国民健康保険がない中で、西淀川で診療所をつくり、支えるための患者組織でした。「僕が「柏花健康を守る会」に来た時（昭和36年）は、塚本のガード下から野里交差点まで1つも信号がなかった。学校に通うのに信号が要るとなって、信号を渡りたい地域の人たちが署名を集めて警察署へもっていく。そうやってできていく。1つやれば『ここにも作って』と広がっていく」というように、ただの患者組織ではなく、まちの人々の要求をまとめて伝えるという活動を担っていました。

◆公害とともに

辰巳さんが西淀川で活動した時期は、公害で大変だった時期と重なります。1975年に市会議員に初当選して、その後2003年まで7期28年務めます。「公害問題の中で、大阪市の工場を中島工業団地へ移転させ補償させて、工場移転後の跡地は大阪市が用地取得して街づくりのために使っていくということが、西淀川では重要だった。これは他区ではなかなかなく、西淀川には中島工業団地があったからできたこと」土地利用という点でも要求を実現していく住民運動が西淀川では広がっていきます。また公害で「住宅は建てられない、環境は悪い、人が住むような所ではない、若い人が結婚して出ていくような町だったら、荒廃してついには破綻する。まず公害をなくさないといけない、公害裁判も勝たないといけない」という気持ちで公害反対運動を行ってきたといいます。

◆住民の意見を直接届ける

辰巳さんの方法は、「西淀川の人たちは公害に苦しむ中から住民本位のまちづくり、教育や医療、福祉、住宅、環境あらゆる問題を自分達の声を行政に反映していこうと努力し、僕らは毎年大阪市の区役所と各局に交渉しに行った。これは喧嘩ではなく、住民の声を市政に届けるというやり方。常に意識してやっていたのは、担当課へ住民と共に要求をもって請願するというスタイル。住民の要望を聴くと、請け負わずに、必ずその人たちと共に大阪市の担当課に共に一緒に行き、窓口の課長と交渉し、そして市会の委員会でも取り上げた。公害運動で身につけた直接住民の声を行政にぶつけることをやった」と、住民の意見を直接届けることを心掛けていました。「学校や公園、保育所、市営住宅を造るというのは全部市民に喜んでもらうこと。行政としても実績。役所も、市民に文句言われるより喜んでもらった方が嬉しい。やっていることは、本来一緒に喜べること。そこをちゃんと分かっていたら、市長がどこの政党という問題ではない」と、住民第一の姿勢だったことがうかがえました。

「いろんな苦労・運動をして、住民に支えられ住民を信頼して、行政に対しても信頼している」と、まちづくりで大切な「信頼」について、教えてくれたインタビューでした。林